

トニ・モリスンの唱える「総体性 (Wholeness)」： 『スーラ』におけるアフリカ系アメリカ人の宇宙観

Toni Morrison's "Wholeness" : African American Cosmology in *Sula*

伊東えり子

Ito, Eriko

序章

トニ・モリソン (Toni Morrison, 1931-2019) の第二作目の作品『スーラ』(*Sula* 1973) には、ボトムという黒人共同体に住む、対照的な性格のスーラ・ピースとネル・ライトのシスターフッドが描かれている。先行研究では、フェミニズム批評の視点からシスターフッドに関する分析が多くなされてきた。例えば、バーバラ・スミスは、1978年に「肉体的セクシュアリティが描かれているのは男女間だけ」であるが「表現された感情」(25) 表現から極めて親密な関係を描いているとして、『スーラ』を「レズビアン小説」と捉えて論じている。90年代には、カレン・カーミンやデボラ・マクドエルが、ネルとスーラの生き方を阻害する父権制社会の価値観や状況に、最後まで抵抗したスーラをフェミニストとして高く評価する傾向を示してきた。一方、2010年代になると、カサンドラ・フェタースは、スーラにも存在する欠陥に目を向け、フェミニストとして評価するのではなく、主人公たちの多面性に注目し、シスターフッドを再考している。総じて多くの従来の研究では、二人の登場人物の性格の分析を通して彼女たちの関係性と生き方を考察してきたといえる。

しかし、この作品において、モリソンは、黒人共同体ボトムの成立過程から、スーラの死後、その共同体の崩壊までを描いており、モリソンが個人対個人の関係性ばかりでなく個人対共同体との関係性にも焦点を当てていることが読み取れる。本論では、上記の先行研究を参考にしてはいるが、主人公たちのシスターフッド及び、スーラと共同体との関係性を中心に分析し、その両方に通底する、西洋文化の認識論とは違ったアフリカ系アメリカ人の「宇宙観」である、物事を「総体 (Whole)」としてみる認識論について検証していきたいと思う。さらに、スーラの死と共同体の崩壊に伴って、黒人文化が主流の文化に同化していく問題を取り上げ、モリソンがアフリカ系アメリカ人の「宇宙観」をいかに保持し彼らの未来へ繋ごうとしているのかを考察する。

第一章では、モリスンの主張する「総体性 (wholeness)」について、ラ・ヴィニア・デロワ・

ジェニングスが分析したアフリカ系アメリカ人の持つ「宗教観」及び「宇宙観」を引用し分析する。第二章では、特に身体描写に注目し、スーラとネルという登場人物達の知覚を共有する二つの主体が一つの「総体 (wholeness)」を構築しながらもそれぞれ違った生き方を選択するに至った過程を検証し、第三章では、スーラの自己創造とネルとの関係、第四章ではスーラと共同体との関係から モリスンのいう「総体性 (Wholeness)」について考察する。第五章ではスーラの死後、ネルと共同体がどのように変容していったのかを述べ、第六章ではアメリカ社会の動向に伴いアフリカ系アメリカ人の共同体の崩壊と黒人文化にある「宇宙観」の喪失の危機の問題を取り上げ、モリスンが黒人文化にある、異質なものをも含め共存する「総体性 (wholeness)」を重視する「宇宙観」によっていかにアフリカ系アメリカ人の未来を繋ごうとしているのかを考察していく。

第一章 モリスンとアフリカの宇宙観

ラ・ヴィニア・デロワ・ジェニングスによると、モリスンは、「キリスト教的二元論が支配的影響力を持っているにもかかわらず、アフリカ系アメリカ人の生活には一元論的神学が無意識のうちに影響を及ぼしている」(26) と認識しているという。モリスンの作品に見出せる、アフリカ系アメリカ人の「宇宙観」の核となるアフリカの伝統的な一元論的神義論についてジェニングスは、次のように説明している。

一元論的神義論は、善と悪を絶対的で排他的な二元論として定義するのではなく、両義的で包括的な統一体として両者を和解させる。...

受動的で女性的な要素である地と水は、能動的で男性的な要素である空気と火を和らげる。そして、対立しながらも均衡を保つ要素(地、水、空気、火)と、その影響(寒さ、雨、熱、風)といった不安定な四元的な統合が、古代と中世の「宇宙論」の核となっていた。両義的で包括的な四位一体性は、絶対善と絶対悪、神と悪魔というマニ教教的二元論をもたらしたユダヤ・キリスト教の一義的で排他的な三位一体信仰に先行している。アフリカの伝統的な「宇宙観」では、善と悪は、高次の宗教的権力者である神、神々、祖先の中に融合されており、彼らは、祝福と呪いの両方を与えるのである。(8)

ユダヤ・キリスト教の一義的で排他的な三身一体信仰が、絶対的悪、神と悪魔というマニ教教的二元論をもたらしたが、一元論的神義論は、善と悪を両義的で包括的な統一体として和解させるのである。この善と悪を和解させた「両義的で包括的な統一体」を「総体 (whole)」として重視するアフリカ系アメリカ人の「宇宙観」は、モリスン作品の基調となっている。

さらに、ジェニングスは、「モリスンがコンゴのヨワ(太陽の四つの瞬間のコスモグラム)と神の四つの顔を潜在的に取り入れ、第四の顔を他の三つに対して浮き彫り」(26)にして

いると述べる。モリスンが用いる第四の顔は、「宇宙の四つの基本的な構成要素（地、水、火、空気）の融合と善と悪の融合の安定したバランスという、正反対のものの融合に根ざしたアフリカの伝統的な思想を示唆している」（Jennings 26）。つまり、アフリカの伝統的な宇宙論では、神々や祖先が善と悪の両方を司り、祝福と呪いの両方を与える存在となっており、これにより、善と悪が一体となって働き、全体としてのバランスを保つことが重要視されているのである。このように、「善と悪が両義的で包括的に存在する四重のバランス」は、善と悪が対立するものではなく、相互に補完し合い、全体としての調和を保つことを意味している。モリスンは、ユダヤ・キリスト教の排他的で一価的な三位一体（絶対的な善と悪）とは対照的なアフリカ系アメリカ人の思想における複雑で多面的な概念を探求している。

モリスンは、「セネガンビアからコンゴ・アンゴラまでの伝統的な村落に見られる、何世紀にもわたる主要な社会宗教的役割と世界観を、」「新世界の文化にフィクションとして媒介している」（Jennings 6）のである。『スーラ』（1973）、『ビラヴド』（1987）、『パラダイス』（1998）における登場人物達「スーラ・ピース、ビラヴド、コンソラータ・ソーサ」は、制度化された共同体と対立する習慣を持つ個人として、「不道德で、人間関係や尊敬される伝統を破壊する反社会的な存在」（Jennings 7）として共同体における魔女と見なされる。彼女たちは、「魔女の非宗教的役割と、魔女のイメージ」を課せられた「アフリカの伝統的志向と（無）意識の残滓」（Jennings 6）として描かれているといえる。モリスンは、「形而上学的なものというだけでなく、人間という形でも、私たちは『悪』のすぐ隣に住んでいる」（Parker 62）と主張し、この「悪」とされる者をも包含する「両義的で包括的な統一体」つまりモリスンのいう所の「総体 (Whole)」として成り立つ世界を描いている。

モリスンは、『スーラ』において、個人対個人の関係に親密な一体感を持った主体を構築する、対照的な性格の二人の主人公達を設定する。彼女たちは、様々な経験を通して影響し合い、一人の人間の「裏」「表」であるかのような関係、つまり二つの主体が一つの「総体性」を形成していく。スーラは、「自己を創造する」と宣言し、共同体の規範に合わない生き方を実行し、共同体のパーリアとされるが、アフリカ系アメリカ人の宇宙観における「悪」または「魔女」をも共存する「総体性」を重視する共同体においては、スーラは放逐されることはない。『スーラ』においては、スーラは、第四の顔として描かれ、ネルに対しても共同体にたいしても影響を与えていく。ここに、パーリアとなったスーラをも包含して、物事を一つの「総体」としてみるアフリカ系アメリカ人の「宇宙論」が読み取れる。モリスンは、『スーラ』において、善と悪、白人と黒人、男と女等を差異化することによって排除や差別の根拠となった当時主流の二項対立的価値観とは異なる在り方を描こうとしているのである。

『スーラ』では、1916年から第一次、第二次世界大戦を経て、1964年に公民権法が通り一応の成果を経た1965年までの時間的な幅が設定されているが、舞台となる黒人共同体ボトムは、公民権運動後崩壊し、白人によってゴルフコースへと変換され、それと共にアフリ

カ系アメリカ人の文化も変容し、主流の文化と同化していく経緯をたどる。『スーラ』は、今では不在となった共同体における黒人女性達の物語なのである。

次の章では、モリスンが身体に現れる様々な表象を用いて描くスーラとネルのシスターフッドに注目し、二人の知覚を共有する経験を通して、二人で一つの「総体性（Wholeness）」が形成されていく過程を検証する。

第二章 知覚を共有する二人の関係性

主人公達ネルとスーラは、互いを深く知り合う前から身体感覚を通して惹かれあい、急速に関係性を深めていったと表現されている。二人は出会った時に「お互いの眼の中に、自分が探し求めていた親愛の情を見出し」（52）、二人の友情は「唐突さにまさるとも劣らないほど強いものになった」（53）のである。ネルとスーラが互いに補い合う親密なシスターフッドを構築することになる要因は、彼女たちを取り巻く環境とそれぞれの母親との関係性によって炙り出されている。

ネルの母親は娼婦だった祖母から離れボトムに移り住み、今では淑女を装い共同体の中で一目置かれる存在となっている。ネルは、祖母の影響を恐れる母親の手元で「素直で礼儀正しい」子に育てられたが、その分、ネルの「熱情」と「想像力」（18）はことごとく抑えられてきた。しかし、曾祖母の葬式のためにニューオリンズに出掛けた時、ネルは、社会規範の外で自由に生きる祖母に好感を抱く。一方、ニューオリンズに向かう列車の中で誤ってジム・クロウ法に反して白人専用車両にいる所を白人車掌に咎められた母親が、咄嗟に白人に媚を売る場面に遭遇したネルは、母親に対して嫌悪感を抱く。今まで保持してきた淑女の体裁が見せかけに過ぎなかったことを露呈した母に対する反発が、「私はあの人達の娘ではない、私は私なのだ」（28）というネルの自意識へと繋がった。

スーラは、男性と奔放に付き合う母親ハナと、第一次世界大戦から帰還後、薬中毒で廃人ようになったプラムと祖母のエヴァが許可した同居人たちと暮らしている。祖母は夫が出て行ってから生活費を稼ぐために保険金目当てに片足になったと噂される「神のごとく（God-like）」（Step 13）家を支配する人物である。ある日、スーラは、母親がスーラを「愛している」が性格の違う彼女を「好きではない」（57）と友人に語るのを偶然聞き、母親の後ろ盾の喪失を強く感じ衝撃を受ける。

成長過程において、二人がそれぞれ母親の言動に触れた時の衝撃が、母親からの精神的分離へと発展し、二人の関係性をより堅固なものにした。二人の性格は、ネルの方が「強く、堅実」に見え、スーラは「3分間以上一つの感情を保持し続けることはなかった」（53）というように対照的だ。しかし、その違いゆえに「お互いの人格に救いを見出した」（55）ネルとスーラは、「自分たちの興味を引いたものはすべて」を「探検してやろうという決意」（55）のもと経験を共有する。ネルは、スーラと二人でいる時のみ厳格な両親のもとですり減った

生气を取り戻すことができた。スーラはネルにとって閉じ込められた自我を解放し、自分の思うままに語り行動を共にする存在となっている。

仲良く一緒にいるときは安全な港に入っているようで、彼女たちはほかの人々のやり方などには目もくれず、いろいろな事柄に対する自分達独自の知覚に集中することができた (55)

二人は、常にお互いの特性を補完し合い、「自分たち独自の」知覚を共有しうる関係性、つまり、二人で一つの主体性、モリスンが言うところの「総体 (whole)」(Barkman 40) を構築していく。白人でもなく黒人男性でもない、黒人女性である彼女達は、白人優位の、父権制社会において「あらゆる自由と勝利は禁じられること」(52) は十分承知している。それでも二人は「将来自分たちになりたいもの」(52) を創造する意思を互いに確認し合っていた。二つの主体が補い合って全体となるような主体が構築されるなら、二人は自分らしく生きることも可能な気がしていたのである。

二人の関係が屈折していくのは幼い少年チキン・リトルを川に投げ入れてしまった後のことである。経験を共にしていた二人は、成長に伴いセクシュアリティに目覚めていく。モリスンは 12 歳の頃のネルとスーラが川べりで穴を掘りながら「最後にその穴が一つになる」まで「口にするのでできない動揺と興奮に捉えられた」(59) 行為に熱中する様子を象徴的に描いている。¹ 性的な興奮をもたらし象徴的な穴掘りの行為に熱中した直後に、二人はチキン・リトルの存在に気づく。この時二人には、羞恥心と自分たちの行為が知れ渡ることへの恐れから、彼を黙らせたい願望が潜在したといえよう。知覚を共有する二人は、ネルが言葉を発し、その時の思いを受け止めたスーラが行動に移すという見事な連携を見せる。ネルがチキン・リトルを呼び寄せ、スーラが彼の両手をもって振り回しているうち、彼がスーラの手をすり抜け、誤って川に落ち、直後に川水が「黒く閉じて」(61) しまったのである。この「閉じた黒い水」は、これ以降、二人の共有する罪の象徴として度々登場する。

最初にネルが「誰かに見られた」(61) と眩く。ネルの恐怖を直ちに共有したスーラは、近くに住む、戦場で悲惨な死に遭遇して PTSD に苦しむ帰還兵シャドラックの家に確かめに行く。彼は、女の子が死に怯えているのかと思い「彼女に永続的なものを納得させ、保証するために」(157) 「ずっとだよ (always)」(62) と言って慰めた。しかし、チキン・リトルを死なせたという事実が「ずっと」つきまとうと捉えたスーラは号泣する。そもそもスーラは、チキン・リトルの死と彼の死が共同体の中で明らかになることを恐れたネルの恐怖を感知し、その恐怖を取り除くために行動に移したのである。しかし、ネルは、チキン・リトルの死が二人の連携行動の結果であったにもかかわらず、取り乱すスーラを冷静に慰めることによって、行為者はスーラであり、ネルはあくまでも傍観者の立場であることを明確化し

たのである。

スーラは「チキン・リトルの強くてきつく握った指の感触が、彼女の手のひらにまだしっかりに残っている」(61)のを感じている。そしてこの身体感触は、チキン・リトルの葬儀の時にも想起されている。ネルは、意識の表層では傍観者として自己認識していた。しかしモリスンは、知覚を共有する二人が同じように身体感覚を通してチキン・リトルの死に対する罪を認識していたということを明確にするために、行為者を「彼女たち (They)」という言葉で表現している。

彼女たち (They) は手を取り合い、棺だけが土の中に横たわるのだということ、…手のひらに残った彼の指の圧力は、永久に土の上に留まることを知っていた。(66)

ネルは意識上では受け入れなかったとしても、ここではネルとスーラは身体感覚を共有しており、亡くなったチキン・リトルの痕跡が、身体的にはっきり刻まれた感触として「永久に (forever)」留まるということを二人は共に感じていたのである。

だが、ネルとスーラの罪の受け止め方の相違は全く違った反応で表現されている。ネルは、傍観者の鎧をきて共犯であることを拒絶しながらも「今にも保安官や牧師の糾弾する指が自分に向けられ…有罪の宣告を受け…縛り首にされそうな気がした」(65)というように、罰を受けることだけを恐れている。ネルのエゴはネルを安全、安心を得る生き方へと向かわせる。スーラの方は「涙が口の中に流れ込み、あごから滑り落ちて服の胸元に丸いシミを作るままにしていた」(66)と自己の罪に対する身体反応が語られており、彼女の心身に自己の罪が刻み込まれた様を表している。このようなチキン・リトルの死に対する認識の相違が、まさにその後の二人の生き方の差異となって描写される。

ネルは、ホテルのウェ이터であるジュードが結婚相手の候補として現れてからは、保身を求めて共同体の規範に合う結婚を選択し、白人に一人前扱いされず、経済的にも不利な立場に置かれ自尊心を傷つけられた夫ジュードを気遣い、男としての認識願望を満たしてやる存在となる。父権制の共同体の慣習に従い夫を引き立てる妻の役割を果たし、子育てをやり遂げ、チキン・リトルの事件のことも隠蔽・忘却することによって共同体の一員としての位置を獲得し、安全に暮らす道を歩んでいくのである。

スーラは、先に言及した通り、「愛しているが…好きではない」(57)という母親の言葉によって母親との情緒的繋がりを失い「頼るべき他者」(118)はいないことを知るが、さらにここでチキン・リトルを川に落とし「水面が閉じて…責任に対する一つの主な感情」(118)を失い自分自身にも信頼が置けなくなった。彼女は、ネルの結婚を機に一人共同体を出て外へと向かっていく。全く別の生き方を選択した二人の関係は、一見ここで途切れてしまったかに見える。しかし、スーラは大学で学問をおさめた後、結局「自分の半身」(121)

のネルを求めて10年後に戻ってくるのである。次の章では一度はよみがえった二人で一つの主体を構築するような「総体性」が、二人の生き方の相違により崩壊する問題について検証する。

第三章 スーラの自己創造とネルとの関係

スーラの帰郷は、ネルに「古いものを新しい目で見させて」(95) 因襲に黙従していた彼女の日常を一変させる。モリスンは、身体表現を用いてネルの精神的解放を描写し、これまでのネルの結婚生活の現実を明確化している。スーラとの間で沸き起こる笑いは「膝ががくがくし、膀胱が活発に動き始め」(97) ネルの身体を揺さぶる。この時ネルは「新しく柔軟な存在になったような」(98) 自己を認識する。ネルは、共同体においては信頼される立場を構築していったが、ジュードとの結婚生活では「長い間笑いがいかに深い奥底まで響いていくか忘れて」(98) いたと記されているように、心身が疲弊し自己の意思を持って「自分の人生」を生きているとは言い難い月日を送ってきたことが示されている。スーラとの再会によって、ネルは生氣を取り戻し、スーラとの「知覚を共有する」(95) 関係が復活する。

ネルはスーラの過去と一緒に生きてきたし、彼女と一緒にいれば、現在とは、絶えずいろいろな知覚を分かちあうことのような気がした。スーラと話せば、いつも自分との対話になる。(95)

ネルはここで改めてスーラが自己を映し出す鏡のような存在であることを再認識したと言える。ネルはスーラを通して「生きている」実感を回復したのである。

スーラは、ネルの生き方とは対照的に、共同体の慣習を無視して結婚もせず「自分の思想や情緒を探索し…いわば実験的な生活を」(118) 送り「自己創造」(92) を目指そうとする。スーラには「核となる中心が無く、自我が無かった」だけでなく、「野望」も「欲望」(119) もなかったが、「芸術的な表現形式を持たない芸術家」(121) と表現される彼女の創造力は、時として共同体の秩序を乱す破壊的な力となる。スーラは、共同体の人々から「パーリア (Paria)」(Tate 168) とみなされた。

スーラは、愛が不在のまま男性と性行為をすることでも共同体の人々から非難される。しかし、自己主張し人生を創造しようとするスーラが男性たちと交わるのは、「苦悩 (misery)」と「深い悲しみ (deep sorrow)」(122) を感じる力を求めたからだと言われている。スーラは、最後にたどり着く「絶望の地に孤独を見出した」(123) 時、「深い悲しみ」に身体が反応し「この上なくちっぽけなものの死に対して」(123) 涙を流す。「捨てられた子供の靴、波浪にたたかれ、溺れさせられて、折れてしまった沼地の草の茎、…」(123)、ここにはチキン・リトルの死に対する悼みと自己の罪に対する痛みが表象されている。フィリップ・ノヴァク

が、「我々は、自分自身の生に刻まれた死に注意を向けることで最も死者を敬うことになる。... 喪に服す行為は生き残りへの志向であり、... 過ぎ去る現在の刹那性に目を向ける目覚めである」(189)と述べているように、スーラは、喪に服し、心の痛みを感じているこの時に「自分自身に会い... 自分と一つに」(123)なり、死者と喪失したものに対して涙していたと言えよう。

共同体の道德、倫理に反して、スーラはネルの夫ジュードとも性的関係を持ち、それがきっかけとなってジュードは家を出て行った。ジュードとスーラの性的関係をスーラの裏切りと捉え被害者意識を持ったネルは、彼女にまとりつく「泥だらけの」「灰色のボール」(109)に象徴される今まで生きてきた結果としての自己と対峙することができない。スーラは、ネルと「常に何でも共有してきた」(95)ため、ネルのジュードへの愛というより「所有している」(119)という感覚を理解せず、ジュードとの性交は彼女にとって「頭の中にある空間を彼が満たしてくれただけ」(144)の行為に過ぎない。

ネルはスーラの倫理観や道德観との隔たりを感じ疎遠になった。しかし、共同体の枠組みの中で善良な妻、母親として生きてきたネルも、いわゆる「悪」と無関係ではないことをスーラは見抜いている。ネルは、チキン・リトルの事件の傍観者としてこの事件との関わりを隠蔽した。また、スーラが廃人同様の息子を殺したエヴァを恐れて彼女を施設に入れた時も、エヴァの財産をすべてスーラの名義とする手続きをとるよう指示し、エヴァを実質的に社会の周縁へと追いやったのはネルだった。スーラが「一番初めにあなたに相談すべきだったのかも知れない... 昔、わたしが怖がった時にはいつでも、あなたはどうかすればいいのか分かっていたものね」(101)と言った時、二人の前に「閉じた川の水面が広がった」(101)という象徴的描写が続く。後に、死の病に倒れたスーラを見舞ったネルに対し、スーラは「誰が善だったのか」(146)と問いかけ、それは「ネルではなく私(スーラ)だったかもしれない」と言い残している。共同体の中でパーリアとして周縁化されたスーラだったが、過ちにも背を向けず向き合い、悲しみと痛みに対峙し喪に服してきたのはスーラの方であり、ここでモリスンは、「善」と「悪」といった概念の二項対立を攪乱させている。スーラもネルも、それぞれ絶対的善、絶対的悪に分けることはできず、アフリカ系アメリカ人の宇宙観である総体的視点からすれば、共同体において他者としたものを排除することの矛盾が示唆されている。

第四章 共同体における「総体性 (wholeness)」

モリスンは、スーラと共同体との関係においても、二項対立的に境界を設け他者としたものを放逐する価値観とは異なるアフリカ系アメリカ人の「宇宙観」を提示している。ネルとスーラは正反対に見えるが、相互に関連し合うというアフリカの概念を体現している。モリスンが「ネルは共同体である」(Step 14)と述べているように、ネルは共同体の価値観を

体現する「秩序があり、西洋に同化し、共同体志向で、慣習的だった」(Jennings 51)人物として描かれている。「愛は所有すること」「誰かを所有し常にそこにいてもらいたい」というのが「共同体の法」である。「結婚、誠実さ、貞節」を重視し、結婚後は、「一人のものとなり他の人とは分かちあわない、それが共同体の価値観である」(Stepo 15)。

スーラは共同体に、共同体の慣習的な価値観や道徳観とは異なる視点を持ち込んだ。スーラから見れば、父権社会で、自ら選択する自由もなく主体的に自分の人生を生きることを放棄して、妻という「職を失うことを恐れて」(119)夫に従う現状に甘んじている黒人女性たちは皆、「死にかけている」(143)。共同体での安全な生活を求めたネルも例外ではない。ジュードは、一家の主人でいられるように、彼の自尊心を支えてくれる「勤勉で、忠実」(83)な妻が必要だった。「二人を一緒に足し合わせれば、一人のジュードが生まれてくる」(83)と語られているように、彼と結婚することで、ネルは主体性を持った自己の主張を放棄し、妻という従来の制限的な女性の役割を受け入れたのだ。ウェンディ・ハーディングが言うように、ネルとジュードの関係は「従来の結婚における性別の不当な補完性を表している」(69)。つまり、彼らの結婚は愛をベースとするより女性の献身と犠牲によって補完されたものである。現状に安住するネルが「地獄とは物事が永遠に続いていくことじゃない。地獄とは変化なのだ」(108)というのに対し、スーラは、「本当の地獄の地獄は、それが永遠に続く」(108)ことだと主張し変化を恐れない。スーラは、「自分には心があり」自らの人生を生きる為に「孤独さえも自分のもの」(143)として受けとめている。スーラは、ジュードに対するネルの甘やかしとは真逆の視点を示し、黒人男性が性的脅威と見なされることによる苦境は、誰もが黒人男性を「うらやみ」「尊敬している」(103-4)証だというユーモアで、ジュードの自己憐憫を笑い飛ばしたのである。スーラは、ジュードがネルのもとを出て行ったのではなく、ネルの慰めによって自尊心を保ってきた自己を嫌悪しネルとの生活を「捨てた」(143)のだと指摘している。

黒人共同体において、「自分の人生を創造」することに挑んだスーラは、共同体における規範を逸脱し、独身のまま自分の選択した人生を全うしようとする。共同体の中で「悪」とみなされるスーラの行為は、「共同体の中に潜む問題、罪の意識／無意識を顕在化」(藤平 75)させ、共同体の人々に「善」を実行させる「暗黙の『法』」(藤平 75)となった。彼女の存在によって共同体の人々は自分たちの生活を再考し行動様式が一変する。今まで子育てに無関心でお酒に飲まれていた母親が、子供がスーラに突き飛ばされたと勘違いして以来、母性を発揮し献身的な母親になった。妻たちは、スーラと寝て捨てられた夫の誇りや虚栄心を慰めてやろうとした。スーラは、祖母のエヴァが麻薬に溺れた息子を焼き殺したことに恐れをなして彼女を施設に入れたが、老人を家庭で手厚く介護することを美德とする黒人女性たちは、老人の介護を厭わなくなった。「不幸の源が確認されると分け隔てなく保護し合い、愛し合うように」(117)なり、夫婦はお互いを大事に、「子供たちを守り、家の修理をし、

彼らのただなかにいる悪魔に対して団結しはじめた」(117)。スーラの魔性を確信した共同体の人々は、彼ら自身の生活を律し団結することによってスーラに対峙したのである。それに対し、スーラは「自分自身の人生を生きる」試みを実行することによって、慣習的な女の役割とは異なる新しい視点を提示した。共同体の人々はスーラを警戒し生活を改め団結することによってバランスを保ちつつも、異質なものを排除することなく包含する一つの総合的な集団を形成していったのである。

共同体にはもう一人魔性を持つものとされた人物がいた。小説『スーラ』が始まる1919年に現れたシャドラックである。第一次世界大戦時、37万人のアフリカ系アメリカ人が白人とは分離された軍隊に従軍した(上杉74)。ジム・クロウ法によって人権が認められていなかった黒人たちは、第一次大戦に積極的に参加することで二級市民から脱却しようとしたが、モリスンは、その結果、戦場で兵士の悲惨な死を見てPTSDを抱え帰郷したシャドラックや薬中毒となり廃人となったプラムのように、犠牲を被った元黒人兵を登場させている。

共同体の人々はPTSDに苦しみ奇行を繰り返す帰還兵シャドラックに対しても警戒を怠らず、人々はスーラとシャドラックを「二人の悪魔」と呼んでいる。しかし、「異常性は恩寵と同じほど自然の一部だと考え」(118)、「悪」をも包含する集団を一つの「総体(whole)」としてみる「黒人の宇宙観」(Tate 168)を持つ共同体には、二人の居場所が存在した。² 共同体の人々がスーラたちを放逐しなかった理由をモリスンは次のように説明する。

彼らが心の奥底で認識しているところによると、神は、賛美歌にあるような三つの顔を持った神ではなかったからだ。神には四つの顔があることを彼らはよく知っていた。そして四番目の顔がスーラの件を説明してくれた。彼らは今までの生涯を通じて、多種多様な形の悪と同居してきたが、それは神様が自分たちの面倒を見てくれると信じていたためではない。むしろ神様には一人の兄弟があって、その兄弟が神の息子でさえ容赦しなかったのだから、どうして自分たちを容赦してくれようか、ということが分かっていたからだ。(118)

モリスンは、明らかにボトム「神の第四の次元、あるいは、悪の次元」(Jennings 9)を認識している。「スーラの第四の顔」は、「彼らの人生における『第四の次元』として機能しており、ボトムの人々は、非破壊的な手段でそれを中和」(Jennings 9)し、バランスをとる。

モリスンは、黒人社会の善と悪に関する価値観を次のように説明する。

黒人は、悪を根絶しようとは思わない。ただ、それから身を守り、うまく操りたいとは思うのですが、決して殺そうとは思わない。悪は人生のもう一つの局面に過ぎ

ないと考えるのです。悪に対する黒人の態度は、多くの他のことに対する反応の仕方と通底しているという印象を持ちました。…それは、黒人がほかの民族に対して長期にわたる政治闘争を組織するのが難しい理由の一つになっています。彼らが寛大であって、多くのあらゆることを受け入れるのもそのためです。黒人は悪や違いを恐れない。悪は相いれない異質な力ではなく、ただ違う力にすぎません。(Tate 168)

「悪」を「違う力」として包含した共同体を一つの「総体 (whole)」としてみる「黒人の宇宙観」(Tate 168)のもとでは、「悪」とされたスーラもシャドラックも共同体の人々に抹殺されることはない。黒人の共同体は、異端をも包含しながら、まるで生き物のように、時代の流れに沿って変容していくのである。

1940年のスーラの死は、ネルに対しても共同体に対しても彼女の精神と力が、黒人社会の権威と価値観を変える可能性を秘めて影響を及ぼし続けた。次に、ネルが対峙できなかった自己の罪とスーラへの愛をいかにして再自覚するに至ったか、そして、スーラを失った共同体はどのように変貌したのかを検証する。

第五章 スーラの死

ネルが自己を見つめ直す契機となったのは、スーラの死後、年老いたエヴァを見舞った時に受けた詰問であった。エヴァに「どういうふうにあの小さい男の子を殺したのか」(168)と尋ねられたネルは「見てただけ (see)」と否定するが、「おまえ、観てた (watched) んだろ？」と、「観ていた (watched)」ネルが、行為者スーラと同罪であることをさらに追求される。エヴァの言葉によって「閉じた黒い水」(170)が、ネルの前に表出する。川に沈んだチキン・リトルを見た時、なぜ「快感を覚えたのか」、なぜ「悲しまなかったのか」(170)。ネルは、シャドラックの家から戻り泣きじゃくるスーラが告白すべきか口にしたとき、黙秘を促した。彼女は、スーラが怯えて「感情的になっているのに対し、冷静に行動し」(170)スーラに言葉でどうすべきかを指示する自分を誇らしく思っていた。罰を恐れたネルは、この事件が闇に葬られることに「満足の思いが歎びを覆い隠し」(170)悲しみを覚えることがなかったのだ。スーラの倫理観、道徳観との乖離を感じていたネルは、初めて自分にもある心の闇に気づく。ネルはエヴァの指摘を受けてここで初めて自己の罪と向き合い、罪を隠蔽し忘却しようとした自己の心の闇を認識したのである。他者から「悪」と言われながら罪を感じ、哀しみと心の痛みを最後まで持ち続けていたのはスーラだったのであり、モリスンは、ここでも二項対立的に絶対的善と絶対的悪とを振り分けることの不条理を明らかにしている。

最後にネルに啓示が訪れたのは、彼女とスーラが経験を共有していた時代に彼女たちの罪に関わったシャドラックとすれ違った時である。ネルは、一気にスーラと過ごした時間に引き戻されている。ネルは、ずっと満たされない心の空洞を抱えていたのはジュードを失った

からだと思っていた。しかし、ネルは自己の欺瞞と向き合い、スーラへの愛を再確認した時、失って哀しかったのはジュードではなくスーラだったことを思い知る。「スーラの過去と一緒に生きてきた」(95) ネルにとって、スーラは、「絶えずいろいろな知覚を分かち合うこと」(95)が実感できた唯一の存在だった。「スーラと話せばいつも自分との対話」(95)となった。さらに、「彼女たちの友情はあまりに強かったので、当人たちですらなかなか自分の考えと相手の考えを区別することができなかった」(83)のである。

スーラと疎遠になってからは、ネルは、彼女の屈折した思いを象徴する灰色のボールを敢えて無視して過ごしてきた。スーラへの思いが蘇った時、「やわらかい毛玉のボールが破れ、そよ風のなかのたんぽぽの綿毛のように吹き散った」(174)と語られている。この心象風景は、亡くなる前にスーラが見たものと同じものである。死に際にスーラは、「私たちが二つの喉と一つの目を持った少女で、代償など何も求めなかった時代のこと」を忘却しているネルを想いつつ、「いろいろなものの姿が、タンポポの綿毛ほど軽やかに彼女の頭の中を出たり入ったり」(147)しながら二人で過ごした時代を回想していた。黒人であり女性という二重の抑圧にある二人がお互いの存在以外には何も持たず、一緒に何かを創り出すしかなかった少女時代。彼女たちは自分自身を創り出す (self-invent) ために、客体と主体に境界線を持たず、まるで「二つの喉と一つの目」(147)を持つ一つの身体であるかのように、補完しあう二つの主体が一つの統一体を構築していったのである。ここに、時間と場所を超えて繋がっているネルとスーラの相関性が示唆されている。

シャドラックに遭遇した時に喚起された「深い哀しみ」に圧倒され、「失った者への哀しみが胸を押し、喉元にこみあげて」(174)、今まで泣くこともできなかったネルが号泣に悶える。「それは心底からの号泣—大声で、長いこと—だったが、奥底もなければ、頂もなく、ただいつまでも環を描き続ける哀しみだけがあった」(174)。ネルは、スーラが存在が生前より一層重きをなし、喪失の哀しみとともに二人の関係が一つに繋がり循環しているのを感じている。まさに知覚を共有し「将来自分たちがなりたいもの」(52)を創造しようとした「二つの喉と一つの目」を持ったネルとスーラが一つになって循環している。モリスンは、この状態を「わたしたちは、仲のよい友だちだった (We was girls together)」と表現している。鶴殿氏が言及するように、このネルの言葉は、「アフリカ系アメリカ人方言にある単数形による語の強調であるだけでなく、ネルとスーラの一体性を強調するものである」(77)。

モリスンが、ネルにとって「(まさにこの時が) 新たな始まりだ」(Stepto 14) と述べているように、喪失したものに対する痛みを抱き続けながらもネルは、スーラ存在の重要性に気づき、現実から目を逸らさず人生を創造しようとしたスーラの生きざまを自己に写しだし、その軌跡を受け継ぎ、自分の人生を生きるためにスーラと共存する「総体性 (wholeness)」を目指した自己を構築していくことになるだろう。

スーラの死に関連して共同体にも変化が起こった。共同体の人々は、自己を律する基準と理由が見失われ、人々の間にあった緊張とバランスが崩れ、もろさを露呈し、内部から崩壊

の兆しを見せはじめる。

自分たちの子供たちをスーラの悪意から守ってきた母親たちには団結して当たらねばならない敵はもはやいない。緊張は消え彼女たちがしてきたような努力をする必要がなくなった。スーラの嘲笑が亡くなったので、他の人間に対する愛情はたるんでさくくれた。…老人の世話をする重荷を…恨むようになった。(153)

スーラが死んで緊張感から解放されて間もなく、「怒りっぽい気分が迎りを支配するようになり」(153) 共同体は対峙すべき「悪」を失い、スーラがやってくる以前の状態に戻ってしまった。

PTSD を病む帰還兵シャドラックは、それまで長年、「自殺記念日」を設けて死の恐怖を一日に凝縮し残りの日々を安定して暮らせるようパレードを行っていたが、スーラの死を知りこのパレードの虚偽性に打ちのめされる。彼は自殺記念日に、一隊を形成し町中の人々を従えてトンネル工事の入り口まで引き連れて行った。黒人は、長年このトンネル工事の仕事にありつけると言われてきた。しかし、アメリカ社会の最下位にある黒人は度外視され、結局「ヴァージニアの少年たち」や「ギリシア人達」(162) など南東欧移民や貧しい白人たちが従事することになり、黒人達の些細な夢でさえも手に入ることのない約束事に終わったのだった。この経緯を思いだした黒人たちは怒りのままにトンネルを壊しにかかった。この時、トンネルの崩壊に巻き込まれて多くの死者が出たのである。

もともとボトムは、元奴隷が奴隷主から与えられた土地から発展した共同体である。かつて、元奴隷が、奴隷主から難しい仕事と引き換えに土地を与えられたのだったが、いざ仕事が終わると肥沃な谷底の土地を与えることを惜しんだ奴隷主に丸め込まれ、荒涼とした「丘の上」の土地があてがわれた。黒人たちは、この悲哀を「ニガー・ジョーク」として受け止め、このボトムという共同体を形成したのだった。トンネルの事件では、その時のように「ニガー・ジョーク」で乗り切る知恵が働かなかった。ジェニファー・E・ヘントンは「彼らは悲しみをもてあそぶことはあっても、それを破壊しようとは決してしない。滅ぼそうとした瞬間、彼らは自滅する」(111) と述べているように「死をコントロールし、トンネルを破壊しようとする」(111) 行為はかれら自身の死へと繋がってしまった。彼らは、この先人の知恵を知っているはずだったが、「スーラ」という共通の敵を失い緊張感を欠いた彼らが、怒りに任せて暴走し惨事を招いたと言えるだろう。次の章では、歴史的背景をもとにボトムの崩壊とその影響について考察する。

第六章 共同体の崩壊に伴うアフリカ系アメリカ人の「宇宙観」の危機

『スーラ』の時代設定は 1919 年から 1965 年までであるが、この間アメリカ社会における

黒人たちは、ジム・クロウ法のもと様々な苦難と闘ってきた。1915～25年にかけて、害虫被害により農園が打撃を受け移住を余儀なくされたため、また、厳しい差別と暴力から逃れるために、より良い生活環境と経済的機会を求めて南部から北部への黒人の「大移動」が活発化した。シャドラックが登場した第一次世界大戦後の1919年には、多くの退役軍人が帰国したこともあり、「労働市場の最底辺を担っていたアイルランド移民や南東欧移民と軋轢が生じた」のである。例えば「1919年7月に始まったシカゴ暴動では、帰還兵10人も含む76人の黒人がリンチで殺され」（上杉 77-78）ている。北部に移り住んだ黒人たちは、北部の大都市でも暴力、人種隔離や職業差別などの困難に直面したが、黒人教会を中心に黒人共同体を形成し対峙していった（上杉 76）。様々な人物を受容する黒人共同体の存在は、黒人が生き延びるうえで重要な役割を果たしたうえ、黒人共同体内部のビジネス市場を拡大する効果もあった。「白人にビジネスを提供されず隔離された」ため、共同体内での自給自足の必要性から、料理店、保険会社、仕立て屋、理容、美容院等のビジネスが立ち上がったのである（バーダマン 183）。しかし、1929年の世界大恐慌により、南部からの移住のうねりは終息に向かった。1940年から45年に第二の「大移動」が起こったが、行先は北部に限らずむしろ西海岸諸州に向いた。スーラが死亡した1940年は白人労働者の就職が優先され、黒人の失業率は白人の二倍に上ったが、第二次大戦時になると、防衛産業の急成長により黒人女性にも雇用者数が増大した。しかし、黒人帰還兵たちには戦時中訓練を受けた技術を生かす仕事はなく、相変わらずジム・クロウの待遇に甘んじた掃除夫や皿洗い等単純作業の仕事しか与えられなかったのである（バーダマン 198-206）。黒人男性は、一人前として生活が成り立つような仕事にありつくことがなかなかできず、結局南東欧移民たちが優先されていた事実がある。

ジム・クロウ法下における黒人を取り巻く厳しい状況は、1964年に公民権法が成立し、翌年の1965年には黒人の投票権法が成立したことによって改善され、アメリカ社会における暴力と差別が解消されるはずであった。しかも、アメリカ経済はかつてなく安定した長期の成長局面に入り、「1945年から1970年まで、国民総生産は全体として五倍になり、白人ブルーカラー労働者の収入は増え、…中産階級化した」、文字通り「豊かな社会」（上杉 122-23）が実現したかのように見えた。しかし、1962年に提示されたマイケル・ハリントンの『もう一つのアメリカ』によれば、経済成長の陰で「貧困ライン」以下で暮らしていたのは全人口の四分の一にあたった」（上杉 122-23）」という事実もあり、格差社会が広がっていたのである。

スーラが亡くなった25年後の1965年には「事情はずっと良くなった。あるいは、そういうふうに見えた」（*Sula* 163）と語られている。「カウンターのうしろで、黒人が働いているのを見ることができた。時には、レジスターのカギを首にかけ、お金を扱っていることさえある。また中学校では男の教師が数学を教えた」（163）というように、黒人の地位向

上が描かれている。しかし、戦後の産業ブームにのりボトムもその影響を受け消費文化が台頭し始め、人々の価値観が変化する。

「戦争中金を儲けた人々はみんな、出来るだけ谷間に近いところに引っ越し、白人が、川下も、川の兩岸も買い占めてメダリオンの町を川岸の二本の紐のように引きのばそうとしていた」(166) うえに、「ボトムの高いところにテレビ局の尖塔を建て」、ゴルフ場に変換することになっていた。「ボトムは本当にいいところだった」と気づいた後で戻りたいと思っても、「今では丘の上に高値がついて、戦後や五十年代に引っ越した黒人たちは」もう戻ることができなくなり、「裕福な白人の家族だけが丘の家に家を建てていた」(166) のである。貧しい黒人たちがそこの一角に残ったが、共同体と呼べる場所はすでになく、「お互いに訪ね合うことはまれになり」(166)、かつてのボトムは崩壊した。³

モリスンは、スーラの喪失に対するネルの哀しみを、崩壊したボトムに表象されるアフリカ系アメリカ人の文化の喪失に対する哀しみと共振させている。本論第二章と第三章で詳述したように、ネルとスーラの関係性は、表向きは正反対のものが相互に関連し合うというアフリカ系アメリカ人のもつ「宇宙観」を体現している。スーラがネルの人生にとって必要な存在だったように、スーラは共同体においても「悪」のように見えながらボトムの良心にとって有用な存在だった。個人の感性と共同体の感性は相互にかかわり合って、共存していたのである。モリスンが描く共同体では、集団の中に個人が埋没するのではなく、エヴァ、スーラを始めとして登場人物たちは個人の意思を自由に表現している。モリスンは黒人の集団が「全員一致や同質性に基づくものではなく、個人の適応性や文化的認識に基づいて… 差異の中での共存」(Harding 173) を目指すものとして捉えている。スーラは共同体に異質な視点をもたらすが、共同体はスーラを共同体から追い出すのではなく共同体の内部でバランスを構築させ、結果的に、二項対立的な排除の思考ではありえない和解を生み出す。そもそも、スーラの「自分を創造する」という宣言は、人種とジェンダーの「二重の危険 (Double Jeopardy)」(Beal 171) によって抑圧されてきた黒人女性たちの潜在的な願望だったともいえる。

ハーディングは、「主流社会では、富や生まれ、職業によって階層化され…人の機能に対してしばしば漸近的なランクを割り当てる」(Harding 92) が、モリスンの社会認識は「西洋のイデオロギーとは著しく異なっており」、「個人と集団の両方の幸福に貢献する双方向的交換に基づく社会」(Harding 92) を理想とすると指摘している。共同体内部では、個人は何かを抑圧されたりして、必ずしも互助組織の体をなしていない。しかし、共同体は、個人的表現を含みこんだジャズのようにパーリアも包含しアドリブを入れながら各パートが全体としてのハーモニーを作っていくような動的な運動態として存在していた。

ノヴァクは、ボトムの崩壊について次のように指摘する。

ボトムを支えてきた価値観、奇抜さや邪悪さを受け入れる能力、狂人や意地悪な人、老朽化した人も含めたすべての人の居場所を見つける能力は、崩壊し始める。そして、この地域は分散し、支配的な文化の流れの中に消え去り、一般化されたアフリカ系アメリカ人の“コミュニティ”の一部として、再定義された形でのみ存在し続ける(188)

支配的な文化の世界にあって、「悪」とされる「他者」や「異端者」も居場所を持つことができる「宇宙観」を持つ共同体は、外部の抑圧にも柔軟に対応して、黒人たちの生存を保証してきた。つまり、多様性を受け入れる文化を持つ黒人共同体の受け皿があったからこそ、自己を再構築しながら厳しい外部の抑圧に柔軟に対応し黒人たちは生き延びてきたのである。モリスンは、この点で、アフリカ系アメリカ人の文化と「宇宙観」の喪失を危惧している。

モリスンは、「キリスト教と、特に西アフリカに特有の信仰とを」(Jennings 182) 巧みに絡めてアフリカ系アメリカ人の「宇宙論」を基底とする作品を描いてきた。例えば、『スーラ』の次作『ソロモンの歌』(1977)においては、主人公ミルクマン・デッドは自分の名前の意味の由来を知るために旅をしながら「四元素(土・気・火・水)」つまり、地中、地面、水の中を歩き、空を舞う経験をする。その過程を経て「彼は過去とつながりを持ち、世界が生き生きしたものだと感じるができるようになる」(LeClair 127) のだとモリスンは説明している。この過程を経て、主人公ミルクマンは、「己の限界と個人が及ぶ範囲の狭さという枠を破り、先祖と一体となった豊かで複雑な今現在の姿を、歴史と横の広がりの中で手に入れる」(Valerie Smith 52)。モリスンは、「本当の大人のための価値判断を可能にする媒介を手に入れるためには、歴史を批判し、検証し、そして正面から向かい合ったうえで、理解すべきであり」、そのことによって「忘れ去られるべきものは忘れ、役に立つものは利用する…そのような判断を可能にする媒介ができてくる」(Schappell 83) と述べている。過去の歴史に向かい合って、役に立つものを利用する判断力を身に付け、叡智を学び、自己を再構築していく場としての共同体の存在が黒人文化の継承の場ともなるのである。

ネルがスーラの死を弔い喪失の痛みを循環させながらも、スーラが生きた軌跡を受け継ぎ自己を構築していこうとするように、モリスンは、アフリカ系アメリカ人の文化的アイデンティティの喪失への心の痛みを循環させながら、異端なものも包含し、共存しながら存続するという「黒人の宇宙論」(Tate 168)、つまり「両義的で包括的な統一体」を重視する文化を繋ぎ、現在を確保することを示唆している。

まとめ

モリスンは、主流の価値観では測りえないものがあるとし、この物語を通して西洋の価値観とは異なる世界観を構築しようとしていた。モリスンが、もし二人が「一つになればより素晴らしい一人の人間となったであろう」(Parker 62) と語ったように、スーラとネルと

いう対照的な二人は、二項対立的な境界を持たず、大きな時間の流れの中で繋がっており、互いの特性を補完し合い、支えあっている。モリスンは、それぞれ二人が主体と客体とに分離せず、経験と知覚を共有する関係を持つ中で一つの主体性が構築されていくのを身体的様相から描いている。ネルの内部で「スーラの喪失の哀しみが循環する」ということは、スーラの死後も彼女の存在がネルの意識下にあるということの意味する。二人の関係性は、自己と親密な他者が混成された一つの現象として存続しているのである。ネルが「人間であることの興奮を味わい、生存というボトムの狭い法を超える機会を得たのは」(Ryan 402)、スーラの存在があったからであり「スーラを通して、ボトムと同じようにネルの人生を変える」(Ryan 402) ことができたのだ。ネルは、白人優位の父権制社会における様々な制約をはねのけ、自分の人生を生き抜いたスーラの生き様を内面に取り込み、「両義的で包括的な統一体」としての主体を構築しながら未来に向けて生きていくだろう。

このアフリカン・アメリカン文化にある「両義的で包括的な統一体」つまりモリスンが言うところの「総体性 (wholeness)」を重視する概念は、悪とされる異端をも含有し、まるで生き物のように時代に沿って変容する黒人共同体にも息づいていた。スーラの存在は、共同体の人々の生き方に多大な影響を及ぼした。「悪魔」とされたスーラと共同体の人々の間の「善」と「悪」についても、モリスンは攪乱させており、スーラの存在に対峙しながら存続していた共同体を描いた。『スーラ』は、善／悪、自己／他者といった対立を呼び起こすが、それを超えて、二項対立を執拗にぼかし、攪乱させ、「パラドックスと曖昧さ」(McDowell 79) へと導く。デボラ・マクダウェルが言うように、このパラドックスと曖昧さは「あらゆる決定論的な対立構造を超越するという点で、解放の可能性に満ちている」(79)。

モリスンは、「キリスト教と、特に西アフリカに特有の信仰とを」基底とする小説を描き、「肉と精神の不可分性と一体性を肯定する非制度的なものへと回帰し、両者を両立不可能な二項対立として二分する制度的なものに再び注意を喚起する」(Jennings 182)。モリスンは、複雑で多面的な人間の営みの中で、二項対立的に善と悪とに分離させ、他者としたものを排除抹殺しようとする狭量な不寛容さに疑問を呈し、互いの差異と多様性を認め合い、調和と結合を求め、異端とされたものとの共存に価値を見出す「両義的で包括的な統一体」、つまりモリスンのいう「総体性 (wholeness)」を重視するアフリカ系アメリカ人の「宇宙論」を軸とする新たな未来を提示していたのである。

「注」

- 注¹: 鵜殿えりか氏は、「モリスンは二人の女のレズビアン・セクシュアリティを果敢に描き出そうとしているし、実際、二人の性行為ははっきりと物語の中に描写されている」(58)と主張している。性行為が描かれていると断言できないが、モリスンは、男女関係とは異なる女性同士のシスターフッドにおける極めて親密な関係性を描いている。
- 注²: トマス・ルクレアとモリスンとの対談の中でも、モリスンは「黒人コミュニティでは、風変わりなものと自由が共存し、... 彼らは多様な行動をとり、感情も豊かだった」(125)と述べ共同体の多様性と柔軟性を述べている。
- 注³: 黒人共同体の衰退は、価値観の変化ばかりでなく、政府の政策も関与していると考えられる。都市再生計画(The Urban Renewal Act of 1949)は、「荒廃」や「スラム」地域を「一掃」し、貧困層の住宅以外の新たな用途のために再建できるようにするものであった。しかし、ミンディ・T・フリラヴは、都市再生計画によって、特に多くの豊かで活気に満ちた黒人のコミュニティがアメリカ中で破壊され、代わりに高速道路、余暇活用スペース、商業施設、高層ビルなどが建設されていったと報告している(73-78)。ボトム崩壊は、この政策の影響を示唆しているともいえる。

「引用文献」

- Barkman, Jane. "The Seams Can't Show: An Interview with Toni Morrison." *Conversations with Toni Morrison*, edited by Danille Taylor-Guthrie, UP of Mississippi Jackson, 1994, pp.30-42.
- Beale, Frances. "Double Jeopardy: To Be Black and Female." *The Black Woman: An Anthology*, edited by Bambara, Toni Cade, Washinton Square Press, 2005.
- Carmean, Karen. *Toni Morrison's World of Fiction*. Whitson, 1993.
- Fetters, Cassandra. "The Continual Search for Sisterhood: Narcissism, Projection, and Intersubjective Disruptions in Toni Morrison's *Sula* and Feminist Communities." *Meridians: Feminism, Race, Transnationalism* 13, No. 2, (2016) : pp.28-55.
- Fullilove, Mindy Thompson. "The New York Academy of Medicine Root Shock: The Consequences of African American Dispossession." *Journal of Urban Health: Bulletin of the New York Academy of Medicine* Vol. 78, No. 1, (March 2001), pp.72-80.
- Harding, Wendy, and Martin, Jacky. *A World of Difference: An Inter-Cultural Study of Toni Morrison's Novels*. Greenwood Press, 1994.
- Henton, E. Jennifer. "*Sula's* Joke on Psychoanalysis." *African American Review* 45. 1-2, (Spring/Summer 2012), pp.99-113
- Jennings, La Vinia Delois. *Toni Morrison and the Idea of Africa*. Cambridge UP, 2008.
- LeClair, Thomas. "The Language Must Not Sweat: *Conversations with Toni Morrison*." *Conversations with Toni Morrison*, edited by Danille Taylor-Guthrie, UP of Mississippi Jackson, 1994, pp.119-128.
- McDowell, Deborah, E. "'The Self and Other': Reading Toni Morrison's *Sula* and the Black Female Text." *Critical Essays on Toni Morrison*, edited by Nellie Y. McKay, G. K. Hall, 1988, (pp.70-90)
- Morrison, Toni. *Beloved*. Vintage Books, 1987.
- *Paradise*. A Plume Book, 1997.
- *Song of Solomon*. Vintage Books, 1977.

—— *Sula*. A Plume Book, 1973.

『スーラ』大杜淑子訳、早川書房、2009年。

*『スーラ』の訳は、大杜淑子訳を参照させて頂き、必要に応じて加筆、変更をした。

Novak, Phillip. "Circles and Circles of Sorrow: In the Wake of Morrison's *Sula*." *PMLA*, 114,2, (March 1999), pp.184-193.

Parker, Betty Jean. "Complexity: Toni Morrison's Women." (1979), *Conversations with Toni Morrison*, edited by Danille Taylor-Guthrie, UP of Mississippi Jackson, 1994, pp.60-66.

Ryan, Katy. "Revolutionary Suicide in Toni Morrison's Fiction." *African American Review*, Vol. 34, No.3, (Autumn 2000), pp.389-412.

Schappell, Elissa. "Toni Morrison: The Art of Fiction." *Toni Morrison Conversations*, edited by Carolyn C. Denard, UP of Mississippi Jackson, 2008, pp.62-90.

Smith, Barbara. "Toward a Black Feminist Criticism." *The Radical Teacher*, No.7, U of Illinois P, (March, 1978), pp.20-27.

URL; <http://www.jstor.com/stable/20709102>

Smith, Valerie. *Toni Morrison :Writing the Moral Imagination*. Wiley-Blackwell, 2012.

『トニ・モリスン：寓意と創造の文学』木内徹、西本あづさ、森あおい訳、彩流社、2015年。引用部分は、翻訳を使わせて頂いた。

Stepito, Robert. "Intimate Things in Place: An Interview with Toni Morrison." *Conversations with Toni Morrison*, edited by Danille Taylor-Guthrie, UP of Mississippi Jackson, 1994, pp.10-29.

Tate, Claudia. "Toni Morrison." (1983) *Conversations with Toni Morrison*, edited by Danille Taylor-Guthrie, UP of Mississippi Jackson, 1994, pp.156-170.

Willis, Susan. "Eruptions of Funk: Historicizing Toni Morrison." *African American Review* 50.4 (Winter 2017) : pp.681-691.

上杉 忍 『アメリカン黒人の歴史：奴隷貿易からオバマ大統領まで』中公新書、2009年。

鶴殿えりか 『トニ・モリスンの小説』彩流社、2015年。

ジェームス・M. バードマン 『アメリカ黒人史—奴隷制からBLMまで』ちくま新書、2020年。

藤平 育子 『カーニヴァル色のパッチワーク・キルト』学芸書林、1996年。